

戦国大名毛利元就（1497～1571年）が居城とした安芸高田市吉田町の国史跡・郡山城。若き元就が当主の座に就き、入城を果たして9月で500年になる。乱世のさなか中国地方の雄へと躍進していく元就にとって、どんなターニングポイントだったのか。今なお引きつけてやまない歴史の妙味とは。研究や地域づくりに携わる3人に語ってもらう。

元就 郡山城入城 500年

年 始 に 語 る ①



県立広島大名誉教授

秋山 伸隆さん(69) 日本中世史

あきやま・のぶたか 1953年鳥取市生まれ。広島大文学部、同大学院で日本史を学んだ。博士(文学)。県立広島大教授を2018年3月定年退職。著書に「戦国大名毛利氏の研究」など。

の西面を兼ね備えているのかもありません。

毛利氏研究者として戦国期の地域史を描き出してきた。元就の家督相続と郡山城入城は1523年のこと。それは「元就本人も思っていない出来事だったのでは」という

家を支えるのが役目と考えた重臣もいた。筆頭が志道重臣です。彼らが手を組み、中心柱になる。元就擁立の流れが決まる。わけです。ちょうど出雲の尼子氏の勢力が安芸に強く、長寿だった志道は、元就に

郡山城入城の2年後には尼子氏との関係を断ち、山口の大内氏と結び付けて広島湾頭の所領を手に入れます。瀬戸内海への進出を考えたのでしょうか。家臣の力を引き出すのがうまく、出身や家柄にこだわらず能力がある者を抜

人生の転機 大名へ飛躍

元就は当時、数え年で27歳です。毛利家の次男であり、本来は当主になる立場ではなかった。ところが兄の興元に続き、その息子の幸松丸も急逝します。毛利家文書には「元就が家督を継ぎ郡山城に入った際に詠んだとされる句が残されています。」

及んだころ。また安芸国内の一領主だった毛利家をどう運営するか、迷いながらも覚悟したんでしょう。この決断が中国地方を制する戦国大名へと飛躍し、元就自身の人生も大きく変わってきたのだからです。

元就は「智将」とも呼ばれ、郡山城を拠点に中国地方の10カ国を平定するまで毛利家を躍進させる。当時の史料を読み込んでいくと、どんな人物像が浮かんでくるのだろうか。

ただ、家臣は一枚岩ではありませんでした。その中で元就の能力を見抜いていた

元就の直筆書状は、他の戦国大名に比べても数多く残っています。とりわけ親子の間で交わされた書状の言葉は、本音であり肉声だと思えます。三本の矢で知られる「三子教訓状」もそう。それを今、私たちが読むことができます。元就の入城500年を機に、彼らが生きた時代をもっと身近に感じてもらえたら。そう願っています。

「毛利の家やし(鷲)のは(羽)を次脇柱」

郡山の麓で夕日を浴びる毛利元就公像

直筆の書状を見ると、非常に慎重なタイプだったようです。その一方で果敢さもある。こうと決めた後の行動はとても早い。どの時代も優れたリーダーは、そ

聞き手は林淳一郎



郡山の麓で夕日を浴びる毛利元就公像

聞き手は林淳一郎